

「趣味の遺伝」論

——漱石の「戦争」小説——

渥 見 秀 夫

(国文学研究室)

はじめに

明治三十八年十二月十一日・高浜虚子宛の漱石書簡——

時間がないので已を得ず今日学校をやすんで帝文の方をかきあげました。是は六十四枚ばかり。実はもつとかゝんといけないが時が出ないからあとを省略しました。夫で頭のかつた変物が出来ました。明年御批評を願ひます。猫は明日から奮発してかくんですが、かうなるも苦しくなりますよ。だれか代作を頼みたい位だ。然し十七八日迄にはあげます。君と活版屋に口をあげさしては済まない。

書きあげたのは、『帝国文学』三十九年一月号に掲載された「趣味の遺伝」。「猫」は十七日に書きあげたらしく、「吾輩は猫である」(七)(八)として『ホトトギス』一月号に掲載された。

「趣味の遺伝」の不首尾については、その後も「趣味の遺伝御読み被

下難有候。結末の一气呵成の所をほめて下されたのは望外の幸福と存候。実は時間がたりなくて、かけなかつたのです。仕舞をもつとかゝんと、前の詳細な叙述な比例を失する様に思ひます。」(三十九年一月十六日・皆川正禧宛)、「あれは頗る比例といふ点から云つては丸駄目の作である。」(二月十三日・森田草平宛)と繰り返している。

全体的な「比例」がとれていない不首尾の因由は、既に作中で、書き手「余」によって確信的に披瀝されていた。

是からの話は端折つて簡略に述べる。余は前にも断はつた通り文士ではない。文士なら是からが大いに腕前を見せる所だが、余は学問読書を専一にする身分だから、こんな小説めいた事を長々しくかいて居るひまがない。新橋で軍隊の歓迎を見て、其感慨から浩さんの事を追想して、夫から寂光院の不可思議な現象に逢つて其現象が学問上から考へて相当の説明がつくと云ふ道行きが読者の心に合点出来れば此一篇の主意は済んだのである。実は書き出す時は、あまりの嬉しさに勢ひ込んで出来る丈精密に叙述して来たが、慣れぬ事

とて、余計な叙述をしたり、不用な感想を挿入したり、読み返して見ると自分でも可笑しいと思ふ位精しい。其代りこゝ迄書いて来たから、漸くの事こゝ迄筆が運んで来て、もういゝと安心したら、急にがっかりして書き続ける元気がなくなつた。

「一篇の主意」「此篇の骨子」は書きおせたとした後の「余瀾」の叙述はわずかに三段落。「一篇の」結びはこうである。

余は色の黒い將軍を見た。婆さんがぶら下がる軍曹を見た。ワゝと云ふ歓迎の声を聞いた。さうして涙を流した。浩さんは塹壕へ飛び込んだきり上つて来ない。誰も浩さんを迎に出たものはない。天の下に浩さんの事を思つて居るものは此御母さんと此御嬢さん許りであらう。余は此兩人の睦まじき様を目撃する度に、將軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも、清き涼しき涙を流す。博士は何も知らぬらしい。

「主意」「骨子」を叙し終えた後にも、一篇を一篇として完結させるために、作者は、「余」にもう一度涙を流させなければならなかつた。二つの涙の「対照」が、「長々しい」「小説めいた」この文章の「小説」化を支えている。もう一度、と言つたが、二度目の涙は初めのと違つて一回限りの落涙ではない。「目撃する度」の流涕なのであつた。その僅かな相違は何ゆえの相違なのであるう。

作品の書き手の「余」は、かなり特異な人物として設定されている。彼は「学問読書を専一にする」学者である以外の何者でもない自分に固執する。

「黄卷青映の間に起臥して書齋以外に如何なる出来事が起るか知らんでも済む天下の逸民」であることを公言し、遺伝を研究しつつも「元来余は医者でもない、生物学者でもない」ことを表明し、小説化を志向する文章を、しかも「詩想」から書き始めていながら「余は文士ではない、西片町に住む学者だ」と弁明する。その、「図書館以外の空気をあまり吸つた事のない人間」である「余」が、どうした訳か「待ち合す人があつて停車場迄行く」べく設定される。「約束をした人」は遂に現われな（浩さん）の母との応対を切りあげる理由にも「ある人」との「面会の約束」が使われる。（……線は筆者、以下同様）

彼の特異さは、しかし、「吾輩は猫である」「坊っちゃん」の書き手の「猫」「おれ」のそれとはまた異なっている。彼には作者漱石の実在性の濃い影が伴っている。作者は彼に、人間を思い設けぬもの（いわば「慮外のもの」）とおそれる自分の実感の影を分与している。

作品冒頭の「余」の「詩想」からして、慮外のものであつた。

陽気の所為で神も氣違になる。「人を屠りて餓えたる犬を救へ」と雲の裡より叫ぶ声が、逆しまに日本海を撼かして満州の果迄響き渡つた時、日人と露人ははつと応へて百里に余る一大屠場を湖北の野に開いた。すると渺々たる平原の尽くる下より、眼にあまる羆狗の群が、腥き風を横に截り縦に裂いて、四つ足の銃丸を一度に打ち出した様に飛んで来た。狂へる神が小躍りして「血を啜れ」と云ふ

を合図に、べら／＼と吐く焰の舌は暗き大地を照らして咽喉を越す
血潮の湧き返る音が聞えた。今度は黒雲の端を踏み鳴らして「肉を
食へ」と神が号ぶと「肉を食へ！肉を食へ！」と犬共も一度に咆え
立てる。(略)「肉の後には骨をしゃぶれ」と云ふ。すはこそ骨だ。
犬の歯は肉よりも骨を噛むに適して居る。狂ふ神の作つた犬には狂
つた道具が具はつて居る。今日の振舞を予期して工夫して呉れた歯
ぢや。鳴らせ鳴らせと牙を鳴らして骨にかゝる。(略)

「怖い事だ」と「余」は言うが、ここで「余」は〈戦争〉を、人間に
よる極限的な肉体冒瀆の現場である〈戦場〉をおそれる実感で想像して
いる。

日露戦争のこれだけ実感的な「空想に耽」っていた「余」が、凱旋兵
士歓迎の新橋駅頭の大群集に慮外の思いを抱く。「何だらう？」——「余」
の、この慮外性を「読者の心に合点」させるべく「小説めいた」文章が
志向される。作者の叙述は勢い(「あまりの嬉しさに勢ひ込んで」)特異
な「精密」さをおびてくる。

凱旋將軍歓迎の万歳の声を、これまた慮外なことに、「余」は発せら
れない。「生れてから今日に至る迄一度も」できなかった万歳を「——
然し今日を出してやらうと先刻から決心をして居た」にもかかわらず、
「出しかけた途端に將軍が通つた。將軍の日に焦げた色が見えた。將軍
の髯の胡麻塩なが見えた。其瞬間に出しかけた万歳がぴたりと中止し
て仕舞つた。何故？」——

何故か分るものか。何故とか此故とか云ふのは事件が過ぎてから
冷静な頭脳に復したとき當時を回想して始めて分解し得た知識に過
ぎん。何故か分る位なら始めから用心をして万歳の逆戻りを防いだ

筈である。予期出来ん咄嗟の働きに分別が出るものなら人間の歴史
は無事なものである。余の万歳は余の支配権以外に超然として止ま
つたと云はねばならぬ。万歳が止まると共に胸の中に名状しがたい
波動が込み上げて来て、両眼から二重ばかり涙が落ちた。

狂神の司どる戦場への狂おしい「詩想」を弄んだ「余」は、今度は一
転して、この「余の支配権以外」の「予期出来ん咄嗟の働き」「名状し
がたい波動」を、「冷静な頭脳」で「分解」してみせる。

「いくら戦争が続いても戦争らしい感じがしない」と言う「余」が、
「不図停車場に紛れ込んで第一に」凱旋將軍の「日に焦けた顔と霜に染
つた髯」を目のあたりにした。その「戦争の結果—— 慥かに結果の一片、
然も活動する結果の一片が眼底を掠めて去つた時」、「満州の大野を蔽ふ
大戦争の光景があり／＼と脳裏に描出せられた」。彼は戦場を実感した
のだ。周囲は「万歳と云ふ歓呼の声」に満ちていた。戦場実感者の「余」
はこの声を「満州の野に起つた咄嗟の反響」と聞く。そして、万歳は文
字通りの意味を有しているが、「咄嗟はワーと云ふ丈で万歳の様に意味
も何もない。然し其意味のない所に大変な深い情が籠つて居る」と力説
する。それは「よく、せきを煎じ詰めて、煮詰めて旨詰めにした声」であ
り、「死ぬか、生きるか娑婆か地獄かと云ふ際、どい針線の上に立つて身
震ひをするとき自然と横膈膜の底から湧き上がる至誠の声」である。「一
心不乱の至境」で「ワーと云ふ」それには、「厭味もなければ思慮もな
い。理もなければ非もない。詐りもなければ懸引もない」。それは人間
が極限状況である〈慮外〉の表現なのである。「余」は、「此誠を聴き得
たる時に始めて」「人界崇高の感」を享受できるのであり、「耳を傾けて
数十人、数百人、数千数万人の誠を一度に聴き得たる時に此崇高の感は
始めて無上絶大の至境に入る」のであって、「余が將軍を見て流した涼

しい涙は此支境の反応だらう」とまで「分解」してみせる。

思い返せば、作品冒頭のあの狂おしい「詩想」の描出は、この、慮外の心身反応に下した「余」の「分解」が「読者の心中に合点出来」て、

「余」が「あり／＼と脳裏に描出」できた「大戦争の光景」が読者の脳裏にも実感的に再現することを「予期して工夫」された用意なのであった。

一一

「無上絶大の至境」に入つて「涼しい涙」を流した「余」には、最終段落の記述とは違つて、「婆さんがぶら下がる軍曹を見」ることになるまでの間に、「どうかもう一遍將軍の顔が見たい」という気持ちに異常に執着する時間があった。

見えないとなると一層「どうかして見てやりた」くなった。「もうたまらない。どうしても見なければならん」と駆りたてられた「余」は、去年の春、通行中の広い屋敷の「邸内を覗いて見たくなつた」時のことを「不図思ひついた」。「源因はとにかく見たいものは見たい」「見たいものは、誰が何と云つても見たいのだ」と、飛び上がつてのぞき見たのだつた。

(略) 到底見る事が叶はないと四冊の状況から宣告を下されると猶見てやり度なる。愚な話だが余は一目でも邸内を見なければ誓つて此町を去らずと決心した。然し案内も乞はずに人の屋敷内に這入り込むのは盗賊の仕業だ。と云つて案内を乞ふて這入るのは猶いやだ。此邸内の者共の御世話にならず、しかもわが人格を傷けず正々堂々と見なくては心持ちがわるい。(略) よし、その儀なら此方にも覚悟

がある。高等学校時代で練習した高飛の術を応用して、飛び上がった時に一寸見てやらう。(略)

「凡てが一瞬間の作用であつたその行為は、「誰が聞いても滑稽で、自らも「滑稽と心得て居」ながらの、「余」にとつて「よくせきの事」なのであつた。

將軍を見て感じ入つた支境の反応として落涙した「余」のやむにやまれぬ(慮外な)好奇心の発露を、「盗賊の仕業」に墮すことなく「正々堂々と」実現させること——これが、「主意」からも「骨子」からも排除された「一篇の」モチーフの一端なのであり、このモチーフによる展開を「端折つ」た結果が、最終段落に集約的に現われることになる。

第二章は新橋事件の翌日の記事である。

「浩さん！」と書き起して、「嗚呼浩さん！一体どこで何をして居るのだ？」「愈飛び込んだ！」と、〈戰場〉での浩一の最期を「あり／＼と」「描出」することで読者の「合点」を実感的に獲得すべく、「！」「？」を含む直接的感情表現をさらに駆使する。

「幸ひ今日は閑だから浩さんのうちへ行つて久し振りに御母さんを慰めてやらう？」と思いたちながら「まづ今日は見合せ様」と断念するまでの過程も、浩一の日記に関連して「元來日記と云ふものは某日／＼の出来事を書き記すのみならず、又時々刻々の心ゆきを遠慮なく吐き出すもの」と語る通りに、現在進行形の体で叙し続ける。訪問に代わる弔意の表わし方は——「何かないかな？うむある／＼寺参りだ」と、河上家代々之墓のある寂光院へ足を運ぶ。そこに先客がいた。「はてな。誰だらう。」——「若い女だ！と余は覚えす口の中で叫んだ。」

(略) どうしやうと迷つて居ると女はすつくら立ち上がった。(略)

顔とハンケチの清く染め抜かれた外は、あつと思つた瞬間に余の眼には何物も映らなかつた。余が此年になる迄に見た女の数は夥しいものである。(略)然し此時程驚ろいた事はない。此時程美しいと思つた事はない。余は浩さんの事も忘れ、墓詣りに来た事も忘れ、極りが悪いと云ふ事さへ忘れて白い顔と白いハンケチ許り眺めて居た。(略)

線部分のような表現はここが初めてではない。既に浩一の魅力を「火桶の中に浩さんと話をするときには浩さんは大きな男である。色の浅黒い髻の濃い立派な男である。浩さんが口を開いて興に乗つた話をするとときは相手の頭の中には浩さんの外何もない。今日の事も忘れ明日の事も忘れ聴き惚れて居る自分の事も忘れて浩さん丈になつて仕舞ふ。浩さんは斯様に偉大な男である」と特筆していた。

個別表現の類似だけでなく、先に浩一の魅力の特筆しておいて、その浩一を上回る魅力の發揮者としての「若い女」への感動を強調する展開形式そのものも、この作者に顕著な表現手法なのである。この手法は、すぐあとの作品「坊っちゃん」でも採られる。

「おれは「うらなり」に惹かれていた(「おれとうらなり君とはどう云ふ宿世の因縁かしらないが、此人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼につく、途中をあるいて居ても、うらなり先生の様子が心に浮ぶ)。その「うらなり」と話している停車場にマドンナとおぼしき「若い女」が初めて姿を現わした。

所へ入口で若々しい女の笑声が聞えたから、何心なく振り反つて見るとえらい奴が来た。(略)おれは美人の形容杯が出来る男でないから何にも云へないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水

で暖ためて、掌へ握つて見た様な心持がした。(略)おれは、や来たなと思ふ途端に、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見てゐた。(略)

この叙法の反復からは、作中人物の特異性・慮外性を超えて、その向こうに作者漱石の痼疾が透視される。

「余」は所謂「寂光院の不可思議な現象」「寂光院事件」について、寂光院の「古い、淋しい」「淡く消極的な情緒」と「美しく綺羅を飾つた女の容姿」の、「相除の対照でもなければ相乗の対照でもない」「不思議な対照」を「学者的に説明」することに筆を費し、「諷語」でもって「寂光院の美人も解ける筈だ」と断を下す。

「諷語」そのものの考察は先考に譲ることにして、ここでは「諷語」の基底に働く「惰性」の作用の方に目をとめておく。「余」曰わく、「吾人が事物に対する観察点が従来の経験で支配せらるゝのは言を待たずして明瞭な事実である」、「吾々の観察点と云ふものは従来の惰性で解決せられるのである」、「過去が既に怖である」とき「未来も亦怖なるべしとの予期は」「当然の事と云はねばならぬ」と。³

「惰性」に「支配」された「予期」に導かれる「時々刻々の心ゆき」に「不図」「一瞬間の」亀裂が走り断絶が生じる。漱石は、女性の慮外の魅力力による自己同一性の亀裂・断絶を痼疾として身内に抱えこんでいた。唯一の大亀裂・断絶であったがゆえに痼疾化したとして漱石にとっての唯一の女性を想定することも許されはするだろうが、ここでは、反復(再発)した亀裂・断絶ゆえに痼疾として常態視せざるをえなかつたのではないかという仮定の方に与しておきたい。反復(再発)の衝撃が、それへのとらわれをおのが心根の常態にせしめるところの、亀裂の奥処に盤踞する宿根としての女性存在をのぞきこむべく誘つてやまな

い、のではないか。

「全体何物だらう？」——「少し変だが追懸けて名前丈でも聞いて見様か、夫も妙だ。いつその事黙つて後を付けて行く先を見届け様か、それでは丸で探偵だ。そんな下等な事はしたくない」。こののぞきこみ方の模索こそが、本作品の一つのモチーフなのであった。

死人の浩一には「女の素性も名前も聞く必要」がない。「浩さんが聞く必要もないものを余が探究する必要は猶更ない。いや是非はいかぬ。かう云ふ論理ではあの女の身元を調べてはならんと云ふ事になる。然し其は間違つて居る。何故？何故？何故は追つて考へてから説明するとして、只今の場合は是非聞き糺さなくてはならん。何でも蚊でも聞かないと気が済まん」。

この慮外の衝動が「文士ではない、西片町に住む学者だ」つた「余」をして「小説めいた事」に手を染めさせたのであり、作者漱石に即して言えば、手を染めた文章が不可避免的に「小説めいた」形を志向せざるをえない所以がそこにあつたのである。漱石は、「小説めいた」文章を「小説」そのものに仕立てるために、根拠不明のこの衝動を「正々堂々と」征服しなければならぬと考へた。日露の戦争の間、漱石は自分に固有のこの戦場に身を置いていたのだつた。

三

高揚する衝動に屈し、「余」は河上家を訪問する。ここからが最終第三章。

四つ目垣の根元には寂光院の花筒にあの女がさしたとおぼしき菊と同種同色の豆菊が咲いていた。浩一の母は嫁でももらつておいたらと洩しながら、「余」が追究しはじめると、「それは……」と言ひよどむ。

(略) 白状して云ふと、余は此時浩さんの事も、御母さんの事も考へて居なかつた。只あの不思議な女の素性と浩さんとの關係が知りたいので頭の中は一抔になつて居る。此日に於ける余は平生の様な同情的動物ではない、全く冷静な好奇獣とも称すべき代物に化して居た。(略) 探偵程劣等な家業は又とあるまいと自分にも思ひ、人にも宣言して憚らなかつた自分が、純然たる探偵的態度を以て事物に対するに至つたのは、頗るあきれ返つた現象である。(略)

例の表現類型。「冷静な好奇獣」は先日その所在を教えられた浩一の日記にくらいつく。——「日記に何か書いてありますか？それは是非拝見ませう」。

伝通院の裏を抜けて表町の坂を下りながら路々考へた。どうしても小説だ。然し小説に近い丈何だか不自然である。然し是から事件の真相を究めて、全体の成行が明瞭になりさへすれば此不自然も自づと消滅する訳だ。兎に角面白い。是非探索——探索と云ふと何だか不愉快だ——探究として置おう。是非探究して見なければならん。其にしても昨日あの女のあとを付けなかつたのは残念だ。もし向後あの女に逢ふ事が出来ないとすると此事件は判然と分りさうにもない。入らぬ遠慮をして流星光底ぢやないが逃がしたのは惜い事だ。元來品位を重んじ過ぎたり、あまり高尚にすると、得てこんな事になるものだ。人間はどこかに泥棒的分子がないと成功はしない。紳士も結構には相違ないが、紳士の体面を傷けざる範囲内に於て泥棒根性を發揮せんと折角の紳士が紳士として通用しなくなる。泥棒氣のない純粹の紳士は大抵行き倒れになるさうだ。よし是からはもう

少し下品になつてやらう。(略)

「小説」に作り為すことへの欲求とそれへの抵抗とが、「泥棒的分子」「泥棒根性」「泥棒氣」へのアンビヴァレントな(諷語)的な態度を際立たせる。『ホトトギス』三十八年七月号に発表した「吾輩は猫である」(五)でも、「泥棒陰土」が「背のすなりとした、色の浅黒い一の字眉の意氣で立派な泥棒であ」り、「彼の眉目がわが親愛なる好男子水島寒月君に瓜二つである」と描かれていた。

「余」は浩一の記事に「二三日一睡もせんで勤務中坑内で仮寝。郵便局で逢つた女の夢を見る」、「只三分の間、顔を見た許りの女を、程経て夢に見るのは不思議である」、「余程衰弱して居る証拠であらう、然し衰弱せんでもあの女の夢なら見るかも知れん。旅順へ来てからは三度見た」の記述を発見し、「日記をびしやりと敲いて是だ！と叫」んだ。男と女の「一瞬間の」感応——その「小説的」な「不思議」、「芝居的夢幻的現象」は「当人の支配権以外に立つ問題だから」、その「因を極めるのは遺伝によるより外に仕様はなからう」と「余」は思いつく。河上家が紀州藩士であつた事実から仮定を重ねて推論する。——「かうこしらへてくると段々面白くなつてくる。単に自分の好奇心を満足させる許ではない。目下研究の学問に対して尤も興味ある材料を給与する貢獻的事業になる。こう態度が変化すると、精神が急に爽快になる。今迄は大だか、探偵だか余程下等なものに零落した様な感じで、夫が為の脳中不愉快の度を大分高めて居たが、此仮定から出立すれば正々堂々たる者だ。学問上の研究の領分に属すべき事柄である。少しも疚ましい事はないと思ひ返した」。

「余」が学校の同僚に紹介してもらつた元紀州藩家老の老人の話によると——

浩一の祖父河上才三は確かに紀州藩士であり、向かいの屋敷・小野田帯刀に一人の娘があつた。娘は藩中第一の美人であつた。娘が才三に懸想し、才三も実は大変貰いたかつたため、結婚の日取りを決めるまでに事は運んだ。ところが国家老の倅が娘に恋慕し、その倅を氣に入つた殿様の御意が下りて、帯刀は河上家を破談にした。両家が従来通り向かい合わせでは、ということ、帯刀は国詰めになり、河上は江戸に残ることになつた(坊っちゃん)の「うらなり」・マドンナ・赤シャツの關係が思い浮かぶ。——才三は「至つて優しく、浩一に生き写し」であり、娘は「今の小野田の妹がよく似て居る」。しかも、浩一と小野田令嬢が顔見知りであつた可能性はない。

「鑑定」「予想」「見込」「予言」は次々との的中し、「平生主張する趣味の遺伝」と云ふ理論を証拠立てることができたと「余」は自足する。「一寸見てすぐ惚れる様な男女」は「輕薄」でも「小説」でも「馬鹿」でもなく、「父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔て、脳中に再現する」だけのことなのである。——「一篇の主意は済んだ」。

「余瀾」として書かなければならないのは、その後の二人の女についてである。

浩一の思い人・小野田博士令妹は、「余」が改めて面会したとき「顔でも赤らめるかと思つたら存外淡白で毫も平生と異なる様子」がなく、「余」は「聊か妙な感じがした」。「余」はもはや彼女に対して浩一とのことで「くだらぬ詮議をする必要は認めて」いない。ところが「女丈に底の底迄知りたい」浩一の母の機転で二人の女は会見を果たし、親交を結ぶ。「余」は浩一の母に「女は中々智慧がある」と感心した。「余」は浩一の母に倣つて博士の妹を「御嬢さん」と呼ぶ。「御嬢さん」は浩一の日記を見せられて「それだから私は御寺参をして居りました」と答へ、白菊を墓前へ手向けたのは「白菊が一番好きだから」だつたと言う。

「趣味の遺伝と云ふ理論を証拠立て」て自足できた「余」は、最後に、理論の実証にかかわりなく「知りたがる」女と、理論通りに生きて平然としている「淡泊」な女という、二人の〈女〉の現実^①に直面させられた。「天下に浩さんの事を思つて居る」たった二人の人間である「此兩人の睦まじき様」は、「趣味の遺伝と云ふ理論」の証明領域を超えている。その「睦まじき様を目撃する度に」「余」が流涕に誘われたのは、それが一回性の「女境」体験とは似て非なるものであった故なのであり、「余」にとつて説明可能だった「將軍を見た時」「軍曹を見た時」の涙「よりも」「清き涼しき涙」だったのは、それが現時での「余」の「分解」能力を超えるものであった故なのである。「余」と同じく理論による説明を存在理由とする「学者」である小野田博士が「何も知らぬらしい」とされるのもまた、その故なのである。読者には、浩さんの悲劇性を超える主題の展開が「予期」される。

「探偵」を「学問」によつて超えた「余」は、今、「学問」を超えた〈女〉の現実に向き合はされている。「余」の筆はここで頓挫を来た。作者漱石は、慮外にも直面してしまつた〈女〉の現実とわたりあう〈恋の戦場〉での実感^②をまだ「小説」化できない。本作品の主題は、分裂しているのでもなければ、隠蔽されているのでもない。浩さんの悲劇性以上の新たな展開が断念されているだけなのである。

四

漱石は「趣味の遺伝」摺筆から旬日をおかずに「吾輩は猫である」(七)(八)を書き上げた。その直後の、十二月十八日・虚子宛書簡――

猫は一返君によんでもらう積りで電話をかけたのですが失望しま

した。はじめの方のかき方が少し気取つてる気味がありはせんかと思ふ。夫から終末の所はもつと長く書く筈であつたがどうしても時間がないのであんな風になつたんです。

此二週間帝文とホト、ギスでひまさへあればかきつづけもう原稿紙を見るのもいやになりました是では小説杯で飯を食ふ事は思も寄らない。

「趣味の遺伝」の轍を今度もまた踏んでしまつたわけだ。確かに時間の制約はあつたらう。だが、それならそれなりの書きあげ方があつてしかるべきだつたらうということにもなる。

(七)で猫の運動(蟻螂狩り・蟬取り・松滑り・垣巡り)と銭湯見物とを「少し気取つて」書いた彼は、(八)で「臥龍窟主人苦沙弥先生と落雲館裏八百の健児との戦争」に紙幅を費した。そして「吾輩は既に小事件を叙し了り、今又大事件を述べ了つたから、是より大事件の後に起る余瀾を描き出して全篇の結びを付ける積りである」と、まるで「趣味の遺伝」張りの口説で珍客「哲学者」を初めて登場させて「消極的の修養で安心を得ると説法」させる。

主人は分つたとも、分らないとも言はずに聞いて居た。珍客が帰つたあとで書斎に這入つて書物も読まずに何か考へて居た。

苦沙弥は一週間「書斎に立て籠つてしきりに何か考へて居」た(九)。苦沙弥が考えこみはじめて七日目に例の「泥棒君」が巡査に連行されて現われた。漱石自身が明治三十八年四月上旬に泥棒に入られたときもちよつと一週間ほどで泥棒が連れられてきたという。(五)で漱石が書いたのは泥棒行為そのものとその余波だけである。彼はあのとき泥棒騒動

の顛末を一件落着の挿話として書こうとしたのではなかった。

「猫」の長編化を意識しはじめた(三)で、漱石は寒月と金田富子との結婚話という新しい話題を導入して、猫に「敵城へ乗り込んで其動勢を偵察」させはじめた。(四)の書き出しは「例によつて金田邸へ忍び込む」であった。「泥棒陰士」を登場させる(五)で、しかし猫は「偵察」に倦みはじめ、「休養は猫と雖も必要である」「吾輩は又暫時の休養を要する」「吾輩は又少々休養を要する」「吾輩は大戦の前に、一と休養を要する」「休養は敵中に在つても必要である」と、休養宣言を頻発するに至る。

「偵察」「泥棒」「探偵」への欲求と抵抗(慮外にも自己の同一性を脅かすへ女)をのぞきこみ、それとのわたりあいをも「小説」の主題として展開するかどうか——漱石自身がそのへ戦争の只中で「考へて居」た。猫の目には映らないその戦争に見入っていた。彼はこの戦争の忌避を自らに禁じ、日露戦争の帰還兵を「幕地に進み了して曠如と吾家に帰り来りたる英霊漢」と称した如く、「天上を行き天下を行き、行き尽してやまざる底の気魄」をもつて自己に固有のこの戦争に臨もうとするのだが、「考へて居」る自分の現在を「小説」へ取りこむ術はまだ身に帯していなかった。

「坊っちゃん」の「おれ」もまた、「椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考へ込んで居」(七)たりするなど、四国辺の田舎町で「考へる」機会を増していったのだが、「考へ込」む内容が主題として展開されることはついになかった。手紙もろくに書けなかった「おれ」は、清の死後、「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」と雄弁を噴出させる。その饒舌の口端には「何にもせぬ」「妙なおやぢ」への親近感がこもっていた。「親譲りの無鉄砲」の射程は、その特異な(慮外な)表現行為そのものにまで及んでいよう。「親譲りの無鉄砲」とは、「分解」

不可能な、慮外な表現衝動を、「当人の支配権」の及ばない遺伝による趣味の範疇内に格納するための性格規定でもあっただろう。「おれ」は「何にもせぬ」「妙な」男の位置で筆を執っている。その位置の慮外性ゆえに一定の滑稽味と悲哀感が特徴的に融合されてくることになる。書くことが誘発した「小説」作りへの欲求に基く表現を、漱石は、「探偵」に墮することとも「学問」に踞踏することとも戦わなければ自分に許すことができなかった。日露の大戦争の前後、漱石が自分に課したもう一つの戦争の所在を、作品「趣味の遺伝」は告げている。

おわりに

「趣味の遺伝」についての旧説は、単行本『濠虚集』中の一編として、あるいはまた漱石の戦争観を窺う一資料として、扱う傾きが強かった。筆者は旧稿で、「書き手の現在」に墮しているこの時期の作者を見出した。その関心の延長上で「趣味の遺伝」の作品としての固有性を考えてみようとした。

竹盛天雄氏は「余」を、「特別な性格」「特殊装置」「特権的な異能性」「異能性・特殊性」「いわば「諷語」的存在」と呼びわけ³る。赤井恵子氏は「一人称の叙述(語り)である以上、全てを疑り始めると不可知論に陥り、読みが進められない。強調したいのは、「余」の言うことに疑いをかける余地が存在するということだ。何か苦渋に満ちた二重性のようなのだが、常にそこにはつきまとう」と言う⁴。本稿は、〈慮外性〉なるいささか面妖な語を介することによって一歩を進め、「余」と、「余」の上に影を落としている作者の躰きについて、いささかなりとも具体的に考察してみた。

〈注〉

- (1) 漱石の文章は、すべて新版『漱石全集』(岩波書店)から引用する。
- (2) 「吾輩は猫である」(八)
- (3) たとえば竹盛天雄『漱石 文学の端緒』(一九九一年六月、筑摩書房)所収の「趣味の遺伝」の副題は「諷語」の仕掛けである。
- (4) 「情性」については、『文学論』第四編「文学的内容の相互関係」第六章「対置法」の「附 仮対法」の中に「吾人の現象に対する解釈は遂に吾人が経験より得たる情性によつて支配せらるゝと云ふも不可なし」などの論及がある。この時期の漱石の創作が『文学論』と不可分に関連していることは「言を待た」ない。例えば、あの冒頭の「詩想」にしてからが既に、第四編第一章「投出語法」中 G、"The God of War is drunk with blood;"で始まるブレイクの詩の一節を引用して「この詩句を味ふ為に先づ「戦」なる特別の観念を要すべきも、こゝに用ゆる「戦」の特性は殆ど普遍的のもののみなれば、従つて此投出語は其独立性、前諸例に比し稍々大なり」と論じていることとの関連が考えられる。しかし、本稿の主題は、むしろその「学問」の先にある。
- (5) 駒尺喜美「漱石における厭戦文学「趣味の遺伝」」(『日本文学』一九七二年六月)には「「趣味の遺伝」のモチーフないしテーマは、二つに分裂していると思う」との指摘があり、江藤淳『漱石とその時代第三部』(平成五年十月、新潮社)には「漱石は、咄嗟の「ワー」と寂光院の「父母未生以前」の沈黙とが対偶を成しているこの作品において、結局『一夜』や『薙露行』で歌つた歌を繰返そうとしていた」、「確かに『薙露行』では筋を立てた。だがその筋立てが、誰にでも「分かる」ものであっては作者が困る。読者は『一夜』の場合と同様に、ひたすら「美しい／＼うつつのやうな夢」を追つていればよい。何故なら漱石は、依然として「分らない」ことを、明示するよりはむしろ隠蔽することを意図していたからである」との指摘がある。
- (6) 漱石夏目金之助は、明治二十五年、徴兵忌避目的で北海道に送籍していた。
- (7) 拙稿「坊っちゃん論——閉じない円環——」(『愛媛国文と教育』第二十九号、平成八年十二月)

(8) 三十九年三月二十三日・虚子宛書簡に「拜啓新作小説存外長いものになり、事件が段々発展只今百〇九枚の所です。もう山を二つ三つかけば千秋楽になります。趣味の遺伝で時間がなくて急ぎすぎたから今度はゆる／＼やる積です。(略)」とある。「ゆる／＼や」ったところで、「書き手の現在」は展開されることになかった。

(9) 「漱石と戦争・序説」(『熊本学園大学 文学・言語学論集』一九九七年六月)

(一九九八年五月八日受理)